令和７年度第２回伊勢市まち・ひと・しごと創生会議　議事要録

◆日時　　令和７年 12 月 22 日（月）19：00～19：40

◆会場　　伊勢市役所東館５階　5-3・5-4 会議室

◆出席委員

中村 三男委員、中村 美香子委員、齋藤 平委員、川上 香里委員、北村 和也委員、鈴村 亜希子委員、西城 宏樹委員、秋山 則子委員、山川 一子委員、安藤 大作委員

◆欠席委員

松月 菜生委員、福村 伝史委員、中村 基記委員、北出 学委員

◆出席職員

情報戦略局【情報戦略局参事、企画調整課長、同課副参事、同課主幹、同課主事３名、
デジタル政策課長、文化政策課長】

環境生活部【市民交流課長、同課副参事、環境課長】

教育委員会【学校教育課副参事、教育メディア課副参事】

健康福祉部【福祉総合支援センター長、同副参事２名、健康課長、保育課長、子育て応援課長、
高齢・障がい福祉課長】

産業観光部【商工労政課長、同課副参事、農林水産課長、観光振興課長、観光誘客課長】

都市整備部【基盤整備課長、都市計画課長、住宅政策課長、交通政策課副参事】

危機管理部【危機管理課長】

◆傍聴者　なし

◆結果概要

１　第３期伊勢市まち・ひと・しごと創生総合戦略（案）について

〇各委員からの意見等及び市の回答は次のとおり。

重点戦略１　未来を支える人づくり

<施策１　子どもを産み・育てやすい環境整備>

・前回会議での、「親になる人に対して、基本的な子どもへの接し方や発達・病気等総合的なことを学ぶ機会を提供することが必要ではないか？」という質問に対して、相談支援を提供するとのことであるが、相談が必要な状況になる前に学ぶ機会を提供する必要があるのではないか。例えば、子育て支援センターに来ている方に対して、遊び場の提供だけではなく、学ぶ機会を提供すればいいと思う。

⇒子育て支援センターで親に対しての健康教育や、子どもの年齢に応じたかかわり方、また妊産婦の方に対して、いろいろな機会を通じて最新の子育ての情報を伝えているところです。

・年齢別人口分布をみても、少子化問題、出生数が減ってきていることは重要課題である。ある離島では、子どもは地域で育てるといった地域の助け合いが文化になっており、そういったところは少子化の減少がゆるやかとの話もある。総合戦略は大きな方向性を記載するものだと思うのが、【課題】にも記載されている地域コミュニティの希薄化に対して予算をつけていくことが重要だと思う。地域コミュニティが活性化することによって、子育ての孤独や不安を少しでも軽くしたり、改善し

たりすることが出来る。そして、コミュニティが活性化したか、その結果として出生数はどうなったのかを明確にしていく必要があると思う。

<施策２　教育環境の充実>

・郷土への愛着を持てる心というのは、自治体ごとに個性豊かな教育をすることである程度可能な立て付けとなっていると思うが、その教育をどこでどうやってやるのかというところが重要で、その効果測定も非常に大事である。
・伝統的な祭りがある地域というのは、煩わしさというのもあるかもしれないが、やり終わったあとの充実感であったり、地域のつながりや結びつきなど、様々な人が子どもにかかわることで、親の子育ての負担も減る。祭りを支援することで、人づくりや人のつながりを支援することになり、最終的に人口減少率を逓減させることにつなげていけるのではと思う。

・郷土への愛着というのはどうやって測るのか。
⇒資料 2 の 3 ページにある基礎指標、「伊勢市に自分のまちとしての愛着、魅力を感じていると思う市民の割合」また、「伊勢市に住み続けたいと思う市民の割合」というアンケートによって測っていく。まずは大きな方向性を表す計画という中で、市民が伊勢のまちに暮らすことをどう感じているかを基礎指標として捕捉していきたい。

・流出しやすいこれから子育て世代になっていくであろう若年層の人たちに対して、「これからも住み続けたいか」というアンケートを取るとよいのではないかと思う。また、まちが自分たちになにをしてくれるかではなく、自分たちがまちのためになにをするかというような、主体的な思いを育む教育が必要なのかもしれない。そういったことも、子育て前の世代のアンケートによって、見えてくるのではないか。
・アンケートでは、「住み続けたくない理由」も調査しているのか。
⇒アンケートは、項目数も多いものであるため、理由の掘り下げまでは行っていない。ただし、若者を対象にしたアンケートとしては、令和 6 年度に、高校生に「高校卒業後、居住地的な進路をどのように想定しているか」、「その理由はどういったものか」といったアンケート調査を行っている。そのアンケートの回答では、職業選択を理由にしている傾向が強く出ている反面、地元に残りたいという理由には、友達と離れたくないというつながりを大事にするという傾向も出ている。

・秋田県が人口減少対策で、郷土愛を育む教育というのに力を入れたという記事の中で、その教育が重くて地元を離れたというインタビューの記事があり、やりすぎもよくないのでバランスが大事である。
⇒かなり価値観が多様化しているため、伊勢市においても郷土愛を育む一方で、いろんな幅広い選択が出来る環境作りが必要になってくる。バランス感覚に留意しながら進めたい。
・難しいかもしれないが、大学を卒業して就職をむかえる 22 歳の女性に特化したアンケートを取り、伊勢に戻ってこなかった理由を聴くのもいいと思う。

・子ども、子育ての政策を決める場に高校生や大学生が参画するといい。自分たちのまちづくりに参画することで愛着につながると思うため、そういった場を提供するといい。
・実際に、男女共同参画について考える場に、学生に入ってもらうことを計画している。
⇒政策を決める場に当該世代である若者に入ってもらうことは大事であると考えている。大仏山のインクルーシブ公園を整備するにあたって、地元の学校にどんな遊具が必要かを考えてもらったり、今年度、市長と高校生との懇談会を開催し、生の高校生の声を聴き、普段どういうところで生活をしているのか、またどのようなことに不満や物足りなさを感じているかなど、意見交換の機会を講じたりしており、さらに拡充していければと思っている。

・若年層の転出は「仕事がない」といった理由が多いと想像している。そのため、若年層の方が伊勢に残って活躍をしているというロールモデルを支援するのも一つかと思う。具体的には、伊勢ブランドのような独自産業の支援や、自治体ならではのブランド認定をすることで一定の付加価値を付けるなど。仕事が無いなら自分たちで作っていく、顧客が市内にいないなら全国や海外の顧客を相手にしていくなど、このまちを変えていくという気概を持っている若者を支援することが大切である。
⇒伊勢に残ったらどういう将来ビジョンが描けるのか、認知を取っていくことが大事と考えている。伊勢で頑張っていただいている企業や個人の方はたくさんお見えになられる。ただ、製造業や企業間取引をしている事業所などは、一般の方にとって直接ご縁がなく、どういったことをしているかということが認知されていない。そのような中で、地元企業の仕事を体験してもらうイベントで認知を取っていったり、また、高校生対象のいせミライプロジェクトという取り組みで、商品開発など、高校生自ら考えて実践していただく活動も実施したりしているところ。そういった取り組みを増やしていければと思っている。

<施策５　移住・定住の促進>
・総合戦略なので戦術面の記載はされていないと認識しているが、施策の実施にあたっては思い切った戦術も必要と思う。

〇本日いただいた意見を踏まえ、事務局が修正した新計画案の確認について、会長一任の了承をいただく。

２　その他
・今後のスケジュールを連絡